

沿線地域の林業活性化促す

CO₂排出量数値化し提示

TXアベニュー八潮



メイン通路の天井ルーバーとベンチ。筑波山の杉間伐材を用いた

八潮駅（埼玉県）直結の高架下商業施設「TXアベニュー八潮」が11日にリニューアルオープンした。同施設は「まちのカフェ」をイメージし、にぎわいを生む場として、誰もが気軽に入れる空間となるよう設計された。企画・設計・施工はスペース（東京都、佐々木靖浩社長）が担当した。

駅改札口前の通路をメインに改装し、通路天井と改札口側入り口左右にある柱の装飾に内装材として杉ムク材を利用。この杉ムク材は、つくばエクスプレス

近郊の筑波山で伐採した間伐材の丸太30本を利用した。天井ルーバーには幅45×高さ120×長さ3400mmの杉ムク材を用い、配置を工夫することで、

し、木材に対する理解を深める「森林保護体験プログラム」を企画。筑波山の杉材にこだわることで沿線地域の1次産業活性化を後押しした。

同プログラムで伐採した杉丸太はベンチ5台に加工し、同施設の通路に配置してくつろげる空間にした。

また、近隣地域の木材を利用することで、

川の流れと山の稜線を表現して八潮らしさを演出した。同社は8月に、同社及び首都圏新都市鉄道（同、渡邊良社長）など、関係者自らが筑波山で木材を間伐・採取

遠方の産地から輸送した場合に比べCO₂排出量を抑え、排出量の差をウッドマイレージで数値化し公表することで、環境への取り組みを可視化した。このリニューアル全体（テナント部は除く）のウッドマイレージCO₂は105キロCO₂／立方メートルで、主要産地のうち最も遠方の宮崎県から輸送した場合と比

べ、198キロCO₂／立方メートルを抑えた。このことは、同施設に飾られている木製ボードに、取り組みの詳細とともに記載され、訪れた人は誰でも見ることができる。